

今年度、3年現代文Bでは文学的文章の教材として、中島敦『山月記』を取り上げた。『山月記』は1942年発表の短編作品である。中国の古典小説『人虎伝』を下敷きに、作者独自の世界を構築した作品として、昨年度取り上げた芥川龍之介の『鼻』（『今昔物語集』を題材に、近代人の心理を描き出した）と通ずるものがある。

戦後まもなく国語教材として取り上げられ、以降、70年余に渡って各社の教科書に採録されてきた、いわば定番教材であり、そのため、人口に膾炙した作品となっている。

・作者について

中島敦は1909年、漢学者の家系に生まれ、深い漢文の素養を身につけた。東京帝国大学卒業後、横浜高等女学校（現横浜学園高等学校）に国語教師として1941年まで8年間勤務した。

教員生活を続けながら作品を執筆、ついでパラオの南洋庁に赴任するが、持病の喘息が悪化、1942年に33歳という若さでこの世を去った。『山月記』は生前に発表された数少ない作品の一つである。

他に、同じく中国古典に取材した『李陵』、『弟子』、『名人伝』、スティーブソンソンを描いた『光と風と夢』などがある。

・『山月記』について

主人公李徴は狷介な性格のため、俗悪な官僚世界に調和できず、詩家としての名声を求めるが、志半ばにして発狂し、虎に変身してしまう。虎となった李徴がかつての親友と再会し、取り返しのでない自身の運命を振り返る悲痛な告白がこの作品の要である。

人が虎に変身するという奇抜な設定であるが、主人公の生き方からは、近代知識人の内面、芸術家の普遍的な苦しみが浮かび上がってくる。

・授業展開について

人物、情景、心情の描写を的確に把握するとともに、構成の巧みさ、漢文訓読調の硬質な文体の魅力を味わうことを意図した。

今回は「読解ノート」を用意し、グループによる読み取りの共有、発表の形でクラス全員参加の読み取りを試みた。

ノートの各ページには内容把握のためのあらすじ、難解語句の意味調べとともに、読者の自由な想像に委ねる問いを用意し、自主的な読みの姿勢を求めた。

次のPDFは、生徒の解答をまとめたものである。

・授業を終えて

グループで意見を出し合うことにより、多様な読み取りを共有することができた。難解な語句と表現に手を焼いた面もあったが、特異な設定の中に見られる普遍的なテーマや、文体の魅力に気づいた生徒も多く、実りある授業となった。

「山月記」まとめ

表紙イラストを描かせた。
あとにいくつかを掲げている。

() 組 () 番

氏名 ()

()

全体構成

七	六	五	四	三	二	一	段
～	～	～	～	～	～	～	P
							場所
別れ	返信の理由③	返信の理由②	李徴の依頼	返信の理由①	袁修との再会	李徴の生い立ち	小タイトル

段	P	時	場所	人物	あらすじ
一	～				隴西の李徴は博学で才能が優れ、若くして官吏になったが、狷介で自負心が強く、満足できなかった。官を退き、詩人として後世に名を残そうとしたものの、文名は容易に揚がらず、苦しい生活のため、一地方官吏になった。しかし、かつて歯牙にもかけなかった同輩の下で働くことに自尊心を傷つけられ、不満の日々を送るうち、ある夜、旅先で発狂し、行方不明となった。

問1 李徴の性格をまとめよ。

秀才だが、狷介、峻峭で自嘲癖がある。プライドが高く他人との協調性や妻子に対する思いやりに欠けるところがある。

問2 李徴の経歴を簡条書きにせよ。

進士に登第
江南尉に任命される
退官
故郷に帰り、詩作に没頭
地方官吏に復職
旅先で発狂
行方不明

問3 李徴が発狂したのはどうしてだと思うか。

地方官吏に復職し、かつての同輩の命令を受ける立場に、自尊心が傷つけられ、狂悖の性が押さえられなくなったから

- 自負する
- 甘んずる
- 潔しとしない
- 焦躁（燥）
- いたずらに
- 豊頬の美少年
- 貧窮に堪えず
- 節を屈す
- 職を奉ずる
- 歯牙にもかけない
- 想像に難くない
- 往年

段	P	時	場所	人物	あらすじ
二	～				翌年、監察御史 袁倬が勅命を帯びて商於を通ったとき、一匹の猛虎に遭ったが、それはかつての友人李徴であった。袁倬はこの怪異を素直に受け入れて李徴の声と対談した。

問1 「あぶないところだった。」とあるが、何が「あぶない」のか。

虎としての李徴が袁倬に襲いかかり、今にも食い殺そうとしたこと。

問2 袁倬の性格をまとめよ。

温和な性格。社交的。友人思い。

問3 「草むらの中からは、しばらく返事がなかった。」のは、どうしてか。

かつての友人に自分の姿が虎になっていて恐ろしいことを確認される恐れと、久しぶりに会ったかつての友人に人間として対面したいがもはや異類の身になっていて自分にはそれができないという迷いや悲しみ。

問4 「異類の身」とは何か。

虎

- 勅命を奉じる
- 途に
- 多勢を恃む
- 言葉をしりぞける
- 恐懼
- 久闊を叙す
- あさましい姿
- 畏怖嫌厭
- 故人（中国）
- 故人（日本）
- 醜悪
-
-

段	P	時	場所	人物	あらすじ
三					李徴は一年ほど前、汝水で闇の中から呼ぶ声を追って駆けていくうちに知らぬ間に虎になったこと、押しつけられたものを受け取って生きていかねばならない恐ろしさと、次第に自分の中の人間の心が消えていく苦しみについて語る。

問1 第一段の「ある夜半、急に顔色を変えて寢床から起き上がると、何か訳の分からぬことを叫びつつそのまま下にとび下りて、闇の中へ駆け出した。」とあるが、これを李徴の立場で説明している部分を、箇条書きにして抜き出せ。

戸外で誰かが呼ぶ 声を追って走り出す 気がつくど虎になっていた。

問2 戸外から李徴の名を呼んだ「声」の主は、どのようなものだと考えられるか。

幻聴か、超自然の怪異を生じさせるものか、「生き物のさだめ」を統べる運命か。

問3 自分が虎になった理由を、この時点での李徴はどう言っているか。

自分が虎になったという個人的な理由が「わからぬ」。対象を一般化して、すべての生き物のさだめとして理不尽な運命に従わざるを得ないとしている。

問4 「おれの中の人間の心がすっかり消えてしまえば、恐らく、そのほうが、おれはしあわせになれるだろう。」について、

(1) そう言えるのはどうしてか。

すっかり獣性に支配されてしまえば、虎としての所業を振り返り、情けなさや恐ろしき、憤ろしさを感じたり、「人間の心」を失っていく恐怖を感じたりすることはなくなるから。

(2) 「しあわせ」に傍点が付してあるのはどうしてか。

人間性を失って完全に虎になってしまったほうが罪悪感に苦しめられることなく気持ち楽になるが、李徴自身はそうなることが本当の幸せとは考えていない。

○ 覚えず (副詞)

○ 無我夢中

○ …に忍びない

○ 残虐

○

四	段	時	場所	人物	あらすじ
～	P				李徴は自分の詩の伝録を依頼するが、袁慄はそれが第一流の作品となるのには、どこか欠けるところがあると感じた。また、李徴は今の気持ちで即席の詩に述べた。

問1 「業いまだ成らざるに」の「業」とは何か。

「業」はなすべき事柄。ここでは詩人として名を残すこと。

問2 「まだ世に行われておらぬ。」とはどういう意味か。

世間に広く知られていない。

問3 李徴はなぜ詩人になったのか。作品が残ることで、詩人としての李徴の名がこの世に残る事を望んだ。
※本来は高級官僚を目指していたはず。

問4 一般に、詩が人を感動させるのはどうしてだと思ふか。

読者の共感を呼ぶ普遍性とか、作者の誠実な感情の吐露とか。

問5 李徴の長短三十編の詩が、「第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか」とあるが、その「欠けるところ」とは何か。

人間性の欠如か、非凡でありながら世に認められない矛盾を巧みに解決する表現上のテクニク

問6 李徴が即興で詠んだ詩「偶因…」の詩には、その「欠けるところ」はどうなっているか。

「旧詩を吐き終わった」長年の思いがかなって、素直な作品になった、李徴の現在と過去、袁慄と自分の対比、吟詠でなく、咆哮する虎となった無念を描く。

○巧拙

○産を破る

○：なりとも

○格調高雅

○意趣卓逸

○あさましい

○自嘲

○肅然

○薄幸

五	段	P	時	場所	人物	あらすじ 李徴は、己の内なる臆病な自尊心と尊大な羞恥心のために虎になったと述べる。そして過去の自分に激しい悔いを感じ、誰一人今の自分の気持ちをわかってくれないと訴える。
---	---	---	---	----	----	---

問1 「なぜこんな運命になったか分からぬ」と言っていた李徴が、「しかし、考えようによれば、思いあたるものが全然ないでもない。」と言って、自分の本心を語り始めたのは、どのような心境の変化によるものか。

即席の詩によって、自分と袁慆を対比することにより、自身に欠けていたものを客観視できなかったのではないか。

問2 李徴が、「進んで師に就いたり、求めて師友と交わって切磋琢磨に努めたりすることをしなかった」のはなぜか。理由を二つ挙げよ。

理由1 自分に優れた詩人の才能がないことを知るのを恐れたから。

理由2 自分を優れた人物と信じ、他人と付き合う必要を感じなかったから。

問2 「理由」の1、2を、李徴はまとめて何と表現しているか。二〇字以内で抜き出せ。

臆病な自尊、心と尊大な羞恥心

問3 李徴は、自分が虎になった理由をどう考えているか。

自分の心の中にある臆病な自尊心と尊大な羞恥心という性情が制御できなくなり、その威信にふさわしい姿になってしまった。

問4 空谷に向かつてほえる李徴の気持ちを、二文字の熟語で表せ。(何語でもよい。)

悲痛 後悔 孤独 哀切 苦惱

- 尊大
- 羞恥
- 切磋琢磨
- 俗物の間に伍する
- 瓦に伍する
- 警句
- 弄する
- 危惧
- 怠惰
- 専一
- 空谷
- 胸を灼く

段	P	時	場所	人物
六	～			
<p>李徴は、別れの前に妻子の今後を袁慆に頼むが、己の詩業を優先した自分を自嘲する。そして、虎になった自分が袁慆を襲うことのないように、帰途にこの道を通らないでほしい、自分の事は秘密にしてほしいと頼む。</p>				

問1 「決して今日のことだけは明かさないでほしい。」と願うのはなぜか。
 ・自分が失踪したことで苦しんでいる妻子に、自分があさましい姿で残酷な行為を繰り返しているのと知らせて、さらに苦しめたくないから。
 ・獣として恥ずかしい姿で生きていると思われるより、人間として尊厳を保ったまま死んだと思われたいから。

問2 李徴は、自分が虎になった理由を、この段ではどう言っているか。

問3 李徴の優しい人間性が読み取れる箇所を指摘せよ。
 自己中心的、利己主義的な、他者を愛し守ることのできない非人間性が虎であったから、それにふさわしい姿に身を落とした。

妻子のことを依頼して慟哭 袁慆の同情心を見据えて、二度と会わないように念を押す

- これに過ぎたるはない
- 慟哭
- 意に添う
- 勇に誇る

段	P	時	場所	人物
七	～			
<p>李徴と別れた一行が、丘の上から振り返ったとき、一匹の虎が月を仰いで咆哮し、姿を消した。</p>				

問1 第七段の表現効果について説明せよ。

今までは李徴は声のみの存在として、心情は声の調子の変化によって描かれていたが、最後に姿を現すことで、視覚に訴えるものとなっている。

問2 ここでの「月」は何を象徴しているか。
 夜明けの近いことを示す。人間の心を失っていく李徴の末路を暗示している。
 李徴を闇、袁慆を光と捉え、両者の交わる時間帯を象徴している。

- 懇ろ
- 堪ええざるがごとき

感想文 ※ 特徴的な感想を一つ、取り上げた。独自の視点を評価したい。

「山月記」の主人公、李徴はプライドや意地に固執した愚かな「人」であった。最後には外も中も「虎」という獣になってしまった彼だが、これは決して他人事、とはいえないと私は思う。プライドも意地も、誰もが持ち合わせている当たり前の感情だ。李徴はそれが前に出やすかったというだけで、まだ「人」である私と、そこまで大きな差はないだろう。むしろ、彼と私とでは似通っている点が数多く存在する。文中で「刻苦を厭う怠惰」とされた箇所がその最たる例で、私は自らの不足点を補うために精一杯の努力をした覚えがない。自身の時間が拘束されることを嫌って、いつもいつもあなあなに物事を流してきた。そのくせ、いざという時にあれが足りない、これが足りないと嘆いて、あろうことか課題の提出を遅らせてしまうのだから余計にタチが悪い。「虎」になってもおかしくない怠惰であろう。

私は、李徴の顛末は他人事ではないといったが、これは自分に通じるものがあること以上に、プライドや意地に固執して、破滅へと身を投じた人間が、インターネットの様々な場で挙げられていることに起因する。各個人が発信者となった現代において、「獣」の吊し上げが頻繁に起きているのだ。明日は我が身との言葉があるように、いつ私自身がそうなるかもしれない。分らないからこそ、散っていった人々を反面教師とする必要がある。

李徴は、「山月記」という小説は、それにぴったりのものだ。李徴は因果応報ではありながら、同情の余地があり、改心しながらも元には戻ることのできない悲壮感を演出する、見ている不快になりたくない愚者だ。現実の、こちらの精神をすり減らしてくる人々とは違う、所詮は紙の中だけの存在。自分と比較し、反面教師とするにはぴったりの存在であろうと、私はそう思った。

